【日本的消防（二）】消防署の一日：訓練

午後いよいよ訓練が始まった

休憩も終り訓練の時間になった。大きく分けて前半の消防隊による防火衣の装着訓練や放水訓練など、後半の救助隊による障害物を突破する訓練や梯子車を使って救出する高所救助訓練など各訓練を実施すると知らされ、どんな展開になるのか興味が湧いた。

最初に１階の装着室で防火衣の身支度を素早くこなす防火衣装着訓練が始まった。5 人の隊員はほぼ同時に装着を終え、車両に向かって部屋を飛び出して来る。この同調は見事だ。次に車庫前に移動し、空気ボンベ、ヘルメットや面体の装着を見せてくれた。煙から呼吸を確保するための面体だ。慎重な内にも大変手際の良さを見せてくれた。

出動時にここで防火衣などを身に付ける装着室。	５人がほぼ同時に装着を済ませ揃って車庫に駆けだす。

ここでは空気ボンベの装着訓練が行われた。	さらに面体の装着、出動には色々な装備が必要なのだ。

そしてヘルメットの装着訓練へと続いた。

さらに車庫前訓練場での放水訓練だ。1台の消防車は、現場指示をする者、消防車を操作する者、ホースを伸ばす者、筒先(水を出す先端部分)を受け持つ者など5人で運用している。現場に着き適切な場所に迅速しかも安全に部署(放水する場所を決める)するためには、普段からの訓練の積み重ねが求められるそうだ。なるほど、見ていると車から一斉に降りた隊員は、素早い動きでそれぞれに行動している。ホースが伸ばされ「放水始め」の号令が飛んだと思うと間もなく、筒先から勢いよく水が噴き出した。消防車は1分間に最大1200リットルを放水する能力が有るそうだ。見るみる間にグランドは水浸しとなり、その吐出量はかなりの量だと思われた。

消防車からの放水訓練、隊員は車外に飛び出してきた。

隊員は二人一組でホースを伸ばして行く。

担いでいるのはホースバッグ、畳み込まれたホースが入っていて、落としながら伸ばして行く。

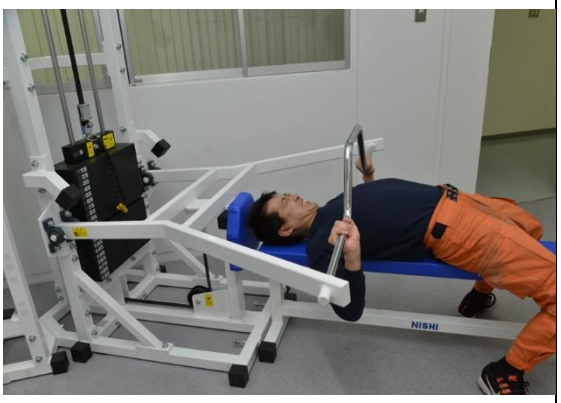
放水を２本のホースからするために、ホースの途中に分岐の器具を取り付けた。

部署が決まったらホースの先端にこの時点で筒先をとりつけることとなる。

放水体勢は整い放水開始を伝える。

段取り良く第１線が放水開始した。	この筒先は放水する量を調整できる優れ物、通常は消防車が調整する。
続いて第２線も放水開始した。	放水を背後から見て臨場感を味わってみた。

実際の火災となると続けて何時間も放水することがあり、署員は体力も重要な要素となるので、休憩時間などを利用してトレーニングルームでの体力錬成を欠かさない。

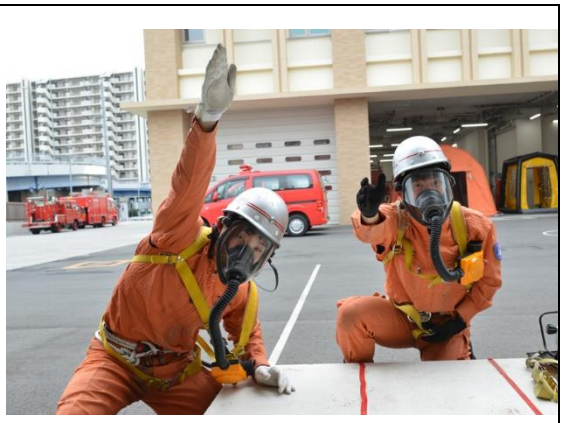
トレーニングルームでの体力錬成が始まった。	隊員は特に下半身の鍛練が肝要と言われる。
	
大分負荷をかけているようで苦しそうな表情だ。	珍しい器具を見た、腕の筋力を鍛えることに間違いはなさそうだ。

消防隊が終わると、救助隊が次の訓練準備を整えて待っていてくれた。実に良い段取りだ。もっとも災害現場ではこう言う連携が必須である。これも消防の能力の一つであろう。目にしたのは隊員が 3 米にも及ぶと思われる高塀と呼ぶ障害物だ。これを乗り越えるらしい。出来るのだろうかとの疑念を持ったが、二人の支え手が高塀を背にして腰を沈め、手を腹の位置で組んだ。その手に跳び手が駆け寄り片足をかけ跳び上がる。支え手は掛けた足を押し上げると見事高塀を乗り越えたのだ。次は跳び越えた隊員が支えてくれた隊員を引き上げて全員が高塀を乗り越えた。なんと見事な軽業ではないか。

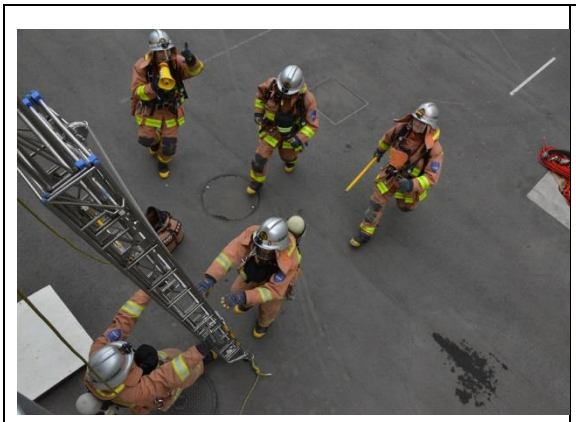
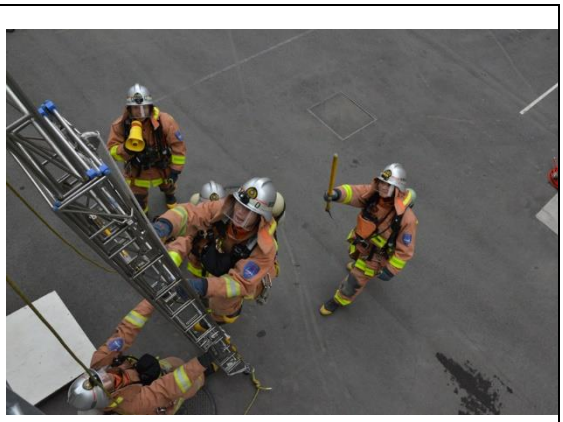
跳び手が支え手の構える手の上に足を掛け跳びあがる。	支え手は跳び手の足を押し上げる
跳び手は高塀の上に到達することができた。	次に跳び手が手を出し、支え手を引き上げて全員が高塀を乗り越えた。

続いて木製で内寸法１米ほどの四角い箱状の工作物がコの字に設置された場所に移動した。全長は 20～30 米程度はありそうだ。さてこれは何だろう。見た限りでは理解できずいると。この中を狭い災害現場と見立て、両手を床に付き滑るように前進する煙道訓練との事なので、煙の発生を前提としているようだが、今日は煙の支度はなさそうだ。隊員は身支度をして入り口から駆け込むと足先で床をける大きな音を立てながら見るみる間に出口から顔を見せた。実に俊敏だ。平時からこんな災害現場を仮想して訓練が行われているのかと、想定力の深

さに感心した。

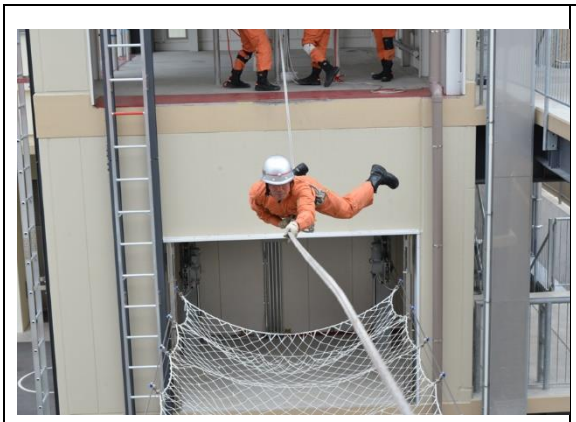
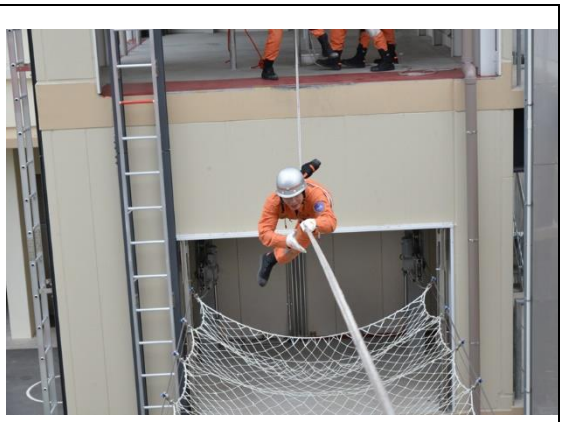
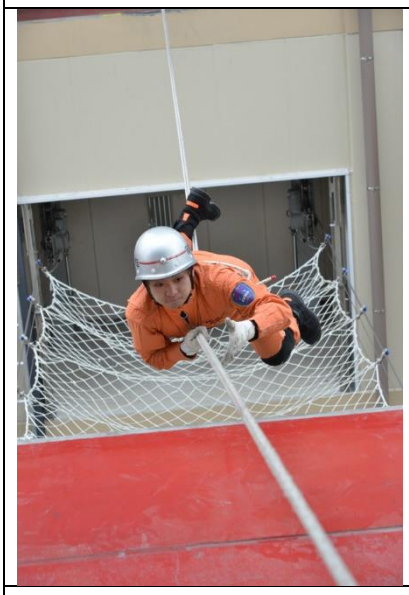
	
まずは空気ボンベ、ヘルメットと面体も装着した。	ほとんど同時に装着完了、手慣れたものだ。
コの字に曲がった箱状の入り口に跳び込むと反対側の出口から間もなく出てきた。	出口まで移動しても隊員同士の距離はきちんと保たれて、素晴らしいコンビネーションだ。

次に 2 階ベランダから逃げ遅れた人を降ろす訓練だ。地上から伸ばした金属梯子で隊員はベランダに進入し、救助する人をロープで降ろすというものだ。どのようにするのかと興味を持って見守ると、壁に掛けた梯子を隊員が昇り、ベランダに達すると、救助を待つ人（ダミー）の腰に幅広のバンドを巻きロープに結び着けると、するすると地上に降ろすことに成功した。見ている限りではいつの間にか事が進んだようで、実に簡単に見えたが、訓練を積み重ねなければここまで容易にはできないのだろう。すると待ち構えていた救急隊の手により、車内に収容されこの救出訓練は終了した。

	
梯子に向かって隊員は駆け寄ってきた。	この後に数名の隊員が続けて梯子を登った。
ベランダで救助を待つ人を抱き上げて・・	ロープで吊られ地上に降ろされる。
素早く救急車に収容する。	聴診器を使用して容態を調べる。

　続いて訓練棟と呼ばれるタワー上の建物に案内されロープ渡過を取材した。建物の中に人が逃げ遅れたことを想定してロープで進入し、助ける設定だ。訓練なので下に安全網が設置されていた。隊員は張られたロープに自身に結んだロープをカラビナと言う器具で連結して安全を確保していたが、「行け」の号令が掛かるとプールにでも飛び込むがごとくロープ上に飛び移り、バランスを保ち

腹ばい状態でいち早く滑るように渡りきった。暫し取材の仕事も忘れ見入ってしまうほどの素晴らしい技量に、訓練とは人をここまで育て上げる事なのかと感動した。

	
奥の足場から勢いよくロープに飛び込んだ。	ロープが揺れたので左足を下げバランスを取っているようだ。
	
ロープを移動する速度も思ったより速い。	相当の腕力が必要と思われる。

続けて隊員は渡り終わった隣の場所から地上に垂らされたロープを体に巻き付けると、訓練棟の外壁に足を着き地上に降りると言うロープ降下の技を見せてくれた。

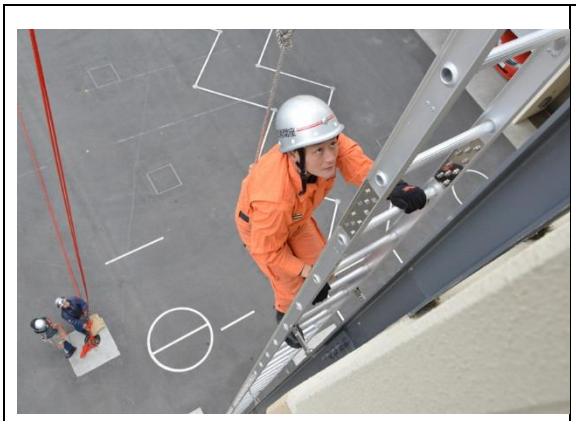
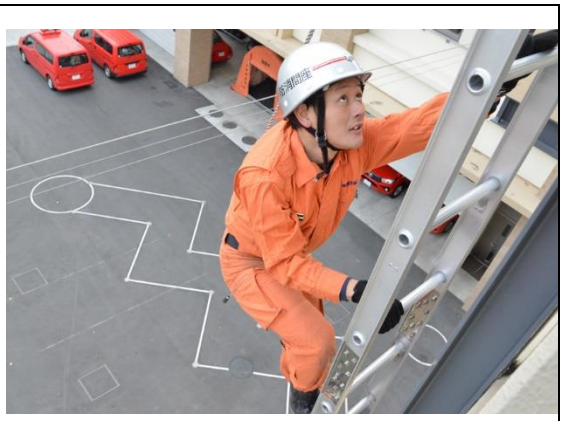
隊員は床から外へ飛び降りて行った。

壁に足を滑らせ降りてくる。	巻き付けたロープの緩め方で速さを調節する。

休む暇もなく訓練は続いた。梯子登はんである。壁に取り付けられた梯子を地上 15 米地点まで如何に早く安全に駆け上るかと言うものである。敏しょう性や同一運動を継続する能力が求められそうだ。隊員が助走を始め梯子に乗り移った。なんと動きの速いこと、まるで機械仕立てのように変わらぬ速度で手足が動き、15 米 50 段の梯子を 8 秒で登り切ってしまった。登はんは瞬く間に終わってしまったが、人がこのような運動の出来ることを目の当たりにし驚きは暫く

続いた。

登り手の靴は梯子の横棒を勢い
よく蹴り、小刻みな金属音が聞こえた。

	
上から見ると登はん者は急に迫ってきた。	近距離での撮影、隊員の表情が見えた。

　さらに続く訓練は、煙の立ち込めた火災現場に逃げ遅れの人を探して侵入する最も危険な、最も適切な判断力が求められる煙中検索である。座間消防の新庁舎はこのよう体験施設も含めて建設されていた。訓練部屋は幾つもの仕切りで細かく区切られ、進行を困難にしてある。そこに機械煙を発生させ火災現場と同等の視界障害を作り出すもの。

これから室内進入、体勢を整える。

隊員は２名１組となり低い体勢を保ち、どのように危険な物が有るか分からない中、空気ボンベを背負い、面体を着け自身の照明を頼りに手探り足探りで救助者を探す。室内を覗くとまったく照明がなく、加えて煙で視界は遮られ、訓練とは言え恐怖感を持った。実際の火災現場での活動を想像した時、隊員の勇気に感服せざるを得ない思いだ。撮影は煙が濃く、なかなか視界が確保出来ず苦慮したが、出来るだけ現場の雰囲気を正確に掴むよう努めた。

だいぶ煙が濃くなってきて、隊員も視界が悪く慎重な様子。	視界は良くないが懸命に検索している。
視界が少し良くなり後ろの隊員の姿も視認することができた。	基本通り、前の隊員と距離を離さずに進む隊員の姿が見えた。
出口付近に隊員二人の姿が確認できた。	訓練とは言え本番さながらの設定に緊張感を持った。出口で隊員の姿を見てひと安心。

はしご車が訓練場に入ってきた。高層訓練棟では救助を求める人が手を振っている。これから梯子車高所救出訓練が始まる。車は適切な場所を見極めると大きな車体を止めた。アウトリガーと呼ばれる足を出し、車体を固定すると梯子がゆっくりと動きだした。バスケット(梯子先端の箱)には既に隊員が乗っていた。間もなくして 6 階の高さのベランダに梯子が届いた。隊員が安全策を講じて逃

げ遅れた人をバケットに収容すると、梯子は向きを変え収縮しながらバスケットをふわりと地上に着けて無事救出訓練は目的を達成した。無機質な材料で出来ている梯子だが、人を助けた場面をこの目で見ると、梯子は人間の大きな手で、優しく包み込むように助けてくれたような気になった。梯子車の能力とそれを操る操作隊員の技量に感動し思わず拍手を送りたい心境だった。

定位に部署した梯子車は頼もしく見えた。

隊員をバスケットに乗せ梯子はゆっくりと伸びて行った。着実に逃げ遅れた人がいるベランダに近づいた。	梯子は基底部にある操作席で操作している。

ベランダからバスケットに移動させる。	バスケットは無事地上に着いた。

以上で訓練は全て終了した。長時間に亘り続けてくださった本署の皆さんご苦労様でした。取材している側も疲労が蓄積しましたが、隊員の皆さんはその何倍も疲れた事と思います。しかしながらそんな気配は微塵も感じさせないのは常日頃の体力錬成にあるのでしょう。素晴らしい訓練を見せていただきありがとうございました。

文／写真 髙橋義一（髙橋ぎいち）

取材協力：神奈川県座間市消防署

翻译编辑 JST 客观日本编辑部